

2022年2月21日

令和4年度(2022年実施)試験「生物」について

1. はじめに

令和4年度大学入学共通テスト「生物」の受験者数は58,649人であった。昨年度から受験者数はほぼ変わっていない。また、平均点は48.81点であり、この結果は、大学入試センター試験を含め、科目名が「生物」になってから過去最低の点数であった。

2. テスト基本情報

【試験の概要】

試験名	受験者数	満点	平均点	大問数	設問数	マーク数
令和2年度 大学入試センター試験	64,623人 (↓2,991人)	100点	57.56点 (↓5.33点)	必答問題5題 選択問題2題	30	34/35
令和3年度 大学入学共通テスト	57,878人 (↓6,745人)	100点	72.64点 (↑15.08点)	必答問題6題	26	27
令和4年度 大学入学共通テスト	58,676人 (↑798人)	100点	48.81点 (↓23.83点)	必答問題6題	26	28

※解答方式：マークシート方式，試験時間：60分

※()内は前年度からの増減を示す。

試験の概要を見る限り、昨年度と今年度の大学入学共通テスト「生物」において大きな変化は「平均点の低下」であろう。では、「なぜ平均点は下がったのか?」「平均点以外で昨年度と変わった点があったのか?」を中心に、以下のポイント解説で述べていく。

3. ポイント解説

今年度の大学入試共通テスト「生物」においては、大問数・設問数・マーク数に大きな違いはなく、また、知識問題(知っていれば解けるもの)の数(昨年度8問→今年度7問)、計算問題の数(昨年度2問→今年度2問)も変わっていない。一方、「平均点」は昨年度と比べて大きく下がっている。設問数、マーク数、知識問題や計算問題の数がほとんど変わっていないにもかかわらず平均点が下がった要因としては、昨年度との相違がみられる「文章量の多さ」と「出題形式の変化」が考えられる。以下では、第3問を例として、それらの2点の違いについて説明する。

(1)「文章量の多さ」について

第3問はまずリード文があり、本大問のテーマ(枝芽の発生)が提示されている。リード文の後に、学生らしき2人による「発生における遺伝子の発現や働き」についての会話が書かれ、2人は論文を探しに図書館へ行き、実験が記載されている論文を見つける。そして、論文に記載されていた3つの実験が提示された後、さらにその実験結果から2人は会話をしながら考察を深めていくのである。この一連の流れは2ページにわたっている。リード文・会話文・実験の説明のすべては文章化され、図表は

一切提示されていない。このように、大問内に図表がひとつも登場しない出題は昨年度にはなかった。

これらのリード文・会話文・実験の説明は、本大問の設問を解くうえで、いずれも必要な情報である。どれかひとつでも欠いてしまうと、本大問の設問は解けないものになってしまう。

しかしながら、2 ページにわたるリード文・会話文・実験の説明の文章は、受験生にとって「情報を整理する」ことにかなりの時間を要したと考えられる。まず、リード文の後に書かれている会話文で2人は何を調べようとしているのか、実験1～実験3はどのような結果を示したのかを読み解かなければならない。続いて、実験1～実験3の後の会話文では、実験ではわからなかった発生のしくみについての考察をしている。これらをきちんと読み解いて内容を理解し、情報を整理しないと、各設問の正解は得られない。

本大問は、得られた実験結果からどのようなことが推察され、どのような実験を用いて考察を深めていくのかという思考力や判断力が求められるものであった。しかし、多くの文章を読むスピードと内容をきちんと読み解く「読解力」や「情報を整理する能力」に左右される大問でもあった。

(2) 「出題形式の変化」について

昨年度は、リード文の後に問1、あるいは実験の説明だけが書かれた後に問1、というように、ひとつのリード文（もしくは実験や会話文）の後にひとつの設問となっていた。しかし今年度の第3問では、一挙にリード文・会話文・実験を示し、その後に問1～問5が出題されるという形式になっている。これは今までになかった形式である（今年度の第2問Bも同様の出題となっている）。

ひとつのリード文の後にひとつの設問という出題形式は情報が整理しやすく、問題冊子の1ページ内に設問を解くための情報が詰まっている場合が多い。しかし、今年度の第3問の形式だと、まず全体を読んで情報を整理する。そして問1を読んで「下線部はどこだったか」とページを戻り、確認をした後に再び問1に戻り解答をする。問2以降も同様に問題冊子内のページを行ったり来たりしなければならず、受験生にとって時間を費やす作業を要したであろう。

4. まとめ

第3問は、文章量の多さ、出題形式の変化といった点において、昨年度とは顕著な違いのある大問となっている。また、第3問の問4と問5では、会話文に出てきた2人がそれぞれ更なる考察を試みており、その考察を裏付けるために必要なことなどを問う出題となっている。「科学的に探究する過程を重視」することを意識した出題となっており、その点では、第3問は共通テストの目的に沿った出題であろう。

今年度の大学入学共通テスト「生物」全体を俯瞰すると、第3問に限らず文章量の多い出題が目立つ。文章量が多いと内容を読み解くことに時間がかかり、試験時間60分では最後の問題までたどり着けなかった受験生もいたのではないかと推察される。その結果として、平均点が低下してしまったのではないだろうか。「科学的に探究する過程を重視」することに重点を置きすぎた問題では、文章量が多くなり、本来評価すべき、生物の「大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力等」（生物の学力）だけでなく「読解力」や「情報を整理する能力」にも左右されてしまいがちで、本来測ろうとしている「生物の学力」を測り切れなくなってしまう可能性が高い。

今年度は、残念ながら「読解力」や「情報を整理する能力」に重きが置かれてしまったように思う。もちろん、「生物」という教科において、実験内容などを読み解く力や、得られた実験結果から情報を整理する力は大切ではある。しかし、高等学校の学習範囲での「生物のテスト」において重視すべき能力かど

うかは疑問である。「科学的に探究する過程を重視」し、「大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題」をどのように両立させて問題を作成していくかという点については、今後も注目していきたい。